

# アジア開発史－政策・市場・技術発展の50年を振り返る－

## 中尾武彦講演メモ

### 1. 発展途上アジア（日本、豪、NZL 以外の ADB 域内加盟国）の成功

- 1) 1960年から2018年にかけて平均5.8%で成長。15倍。シェアも4%から24%に。
- 2) 絶対的貧困率は1980年の68%から2018年の7%に縮小。
- 3) 平均寿命は1960年の45歳から72歳に27年延長。
- 4) 教育期間は3.5年から8.9年に。

### 2. 主なメッセージ

- 1) 市場、民間セクターが大事。明治以来の日本の発展、中国の改革開放政策
- 2) 輸入代替と輸出主導。むしろ External Oriented Policy と呼ぶべき。輸入代替には社会主義、反植民地主義（自力更生）、中心周辺理論（Prebisch、1962年論文）の影響。
- 3) Industrial Policy はかならずしも成功しない。初期には有用。
- 4) There is no such thing as Asian Consensus. Pragmatism、Gradual and Sequential Approach、学ぶ姿勢。中国の成功例。しかし標準的経済理論から見て異質ではない。
- 5) Asian Century と喜ぶのは早い。残された課題、平和の維持、ソフトパワー。

### 3. 各論のポイント

- 1) 政府の役割。Institutions、公共財（インフラ、教育）、外部性（環境）、所得再分配、研究開発を促進。リーダーによるビジョンも大事。
- 2) 産業構造の転換。農業の役割。製造業の意義。リープフロッグはあるか。サービスセクターの拡大と重要性。
- 3) 技術の重要性。クルーグマンのアジアの成長は TFP（全要素生産性）に基づいていないという批判はおかしかった。雇用、産業、貿易などへの新技術の影響。
- 4) 教育年限の拡大。保健の改善で寿命も延びた（栄養・衛生、分娩支援、予防注射、抗生剤、病院）
- 5) 高い貯蓄が高い投資に。銀行セクターと資本市場の役割。資本市場も重要性を増しつつある。
- 6) インフラへの投資。運輸交通では、モータリゼーションから鉄道の見直し。電気。水道授業では PPP も活用。水力から石炭・石油火力から再生可能エネルギーへ。

- 7) 開放的貿易体制と FDI のインパクトが大きかった。Flying Geese から Global Value Chain へ。
- 8) マクロの安定性。アジア通貨危機（2010 年のスタラスカーンの反省）とマクロ経済政策、金融セクターの改善。世界金融危機の見方。
- 9) 貧困削減は進んだが所得分配は多くの国でジニ係数が上昇。技術とグローバル化の影響。日本の高度成長期の例。
- 10) ジェンダーの平等の進展。多くの国で女子の教育機関が男子を上回っている。雇用、政治での活躍の必要性。
- 11) Grow Fast Clean Later の政策の転換。水、空気、土壌、海洋の汚染。気候変動への取り組み。
- 12) バイ、マルチの機関の役割も重要。
- 13) 人口構造の影響。多くの国で人口の配当（15 歳から 64 歳の生産年齢人口の比率の上昇）。一方、中国を含めすでに人口のタックス、高齢化の問題。資源が未来への投資ではなく、高齢者のために使われるという問題。人口は減り続けるのか。日米の比較。

日本	1960－70 年	平均成長 10.4%	人口増 1.1%、配当 1.1%、その他 8.2%。
	2010－18 年	平均成長 1.0%	人口増 -0.2%、配当 -0.6%、その他 1.8%
米国	2010－18 年	平均成長 2.2%	人口増 0.7%、配当 -0.3%、その他 1.8%

#### 4. 編纂の目的

- 1) アジア自身の観点から客観的、包括的な著述
- 2) 中尾の「発展の 8 条件」（インフラ、教育・保健、開放的体制・市場、マクロの安定、平等、ガバナンス、リーダーシップ・ビジョン、平和と安定）から発展
- 3) 2017 年出版の ADB50 年史とコンパニオン

#### 5. 本の特徴（特に世銀による 1993 年の East Asian Miracle に比べた場合）

- 1) 国（日本、NIES、マレーシア・インドネシア・タイ以外）、期間のカバレッジ
- 2) 新しい分野（気候変動、高齢化、アジア危機、世界金融危機、新技術）
- 3) ADB のエコノミスト・スタッフの知見を糾合（農業、インフラ、教育・保健、気候変動、ジェンダーなど）